The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青森県弘前市方言の確認要求表現
Author(s)	松丸, 真大
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2004, 6, p. 156-169
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第6号（2004年3月）156-169

青森県弘前市方言の確認要求表現

松丸　真大

【キーワード】弘前市方言、確認要求表現、バ、ッキャ、デネー

【要旨】

本稿では、青森県弘前市方言の若年層話者に用いられる確認要求表現のうち、標準語のデハナイカに相当するものをとりあげ、考察を行った。その結果、以下の点が明らかになった。

(a) バ・ッキャは〈ではないかⅠ類〉に相当し、《聞き手誘導型》の確認要求を表す。デネー＋文末詞は〈ではないかⅡ類〉に相当し、《聞き手依存型》の確認要求を表す。

(b) バ・ッキャは同じ《聞き手誘導型》の確認要求を表すが、以下の点で異なる。

(b-1) ッキャは独り言、個人的な見解を述べる場合に用いられない

(b-2) バは年上に対して用いにくい

(b-3) 両者共に「ね」相当の文末詞と共起するが、ッキャは加えて「よ」相当の文末詞とも共起する

(c) (b) からッキャは情報を「共有すべきもの」あるいは「共有したもの」として提示し聞き手に確認を求めるのに対して、バは「話し手の認識と現実の状況がそぐわない状況で、話し手の認識を提示する」という意味をもつと考えられる。

1. はじめに

青森県弘前市方言では、確認要求表現として次のような形式が用いられる。

(a) バ・バナ・デバ・デバナ

(b) ジャナ

(c) ッキャ

(d) デネー｛φ／ガ／ナ／ンズ｝

(e) ベ

このうち (a) ～ (c) の形式は、(2) のように同じ文脈に現れることができ、標準語の「ではないか」に相当する用法を持つ。

(2) a. ほら、あそこに郵便ポストがある<u>じゃない</u>。そこを曲がって…

b. ほら、あそこに郵便ポストがある｛バ（ナ）／デバ（ナ）／ジャナ／ッキャ｝。

一方で (d) は、

(3) a. お前、体調でも悪い<u>んじゃないか</u>？

b. お前、体調でも悪いンデネー｛φ／ガ／ナ／ンズ｝？

のように、これも標準語の「ではないか」に対応する用法を持つ。

本稿では、当該方言の「ではないか」相当形式をとりあげ、(i) これらの形式がどのように使い分けられているのか、(ii) 使い分けられているとすれば、それはどのような分節を行っているのか、といった点について、若年層話者[1]の内省をもとに論じる。ただし、確認要求とは言えない用法を記述する一方で、「べ」など明らかに確認要求を表す形式を扱わない点で、当該方言の確認要求表現全体を扱ったものではないことに注意されたい。

以下、§2で各形式について概観し、§3で分析の枠組みについて述べる。それを踏まえ、§4で各形式を個別に記述し、§5で同じタイプの確認要求を表すバとッキャについて詳しく考える。なお以下では議論の対象となっている方言形式のみをカタカナ表記、その他の部分は共通語訳し、ひらがな表記で示すことにする。また、文の適格性を表すには次のような記号を用いる。「*」は文が不適格であること、「??」は文が不自然であること、「？」は文がやや不自然であることを表す。

2.　形式の分布と社会言語学的な情報

上で述べたように、バ（ナ）・デバ（ナ）・ッキャ・ジャナ・デネー（＋文末詞）・べといった形式が確認要求表現として用いられるが、本稿ではこれらの形式のうち、バ（ナ）・ッキャ・デネー（＋文末詞）の 3 系統の形式に焦点を当て、記述を行う（理由は後述）。以下では、これらの形式の接続・共起関係・社会言語学的な情報について、順に述べる。

まず、接続の点を確認しておく。バ・ッキャはどちらも用言相当の形式に接続する。したがって（6）や（7）のように、ナ形容詞の語幹や名詞に指定辞を介さず接続することはできない。

（4）　ほら、あそこにピンク色のシャツを着ている人いる｛ッキャ／バ｝。【動詞】

（5）　家、駅に近い｛ッキャ／バ｝。【イ形容詞】

（6）　あいつ最近元気｛だッキャ／*ッキャ／だバ／*バ｝。【ナ形容詞】

（7）　お前の誕生日来月｛だッキャ／*ッキャ／だバ／*バ｝。【名詞】

一方、デネー（＋文末詞）は体言相当の形式に接続する。そのため、動詞や形容詞に接続する場合は、「ノ」を介して接続する必要がある（8〜9）。

（8）　たぶん、あいつは来ない｛*デネーガ／ンデネーガ｝。【動詞】

（9）　お前、体調でも悪い｛*デネーガ／ンデネーガ｝。【イ形容詞】

（10）もしかしてこの 2 つ、同じ｛デネーガ／ナンデネーガ｝。【ナ形容詞】

（11）もしかして、2 組の山田｛デネーガ／ナンデネーガ｝。【名詞】

次に、各形式と文タイプとの関係であるが、以下のようにどの形式も平叙文に現れる。加えて、バは WH 疑問文に現れることができる。

（12）〔俺の眼鏡知らない？〕机の上にあった｛ッキャ／バ／ンデネーガ｝。【平叙】

（13）どさ（どこへ）行く｛*ッキャ／バ↓／*ンデネーガ｝。【WH 疑問】

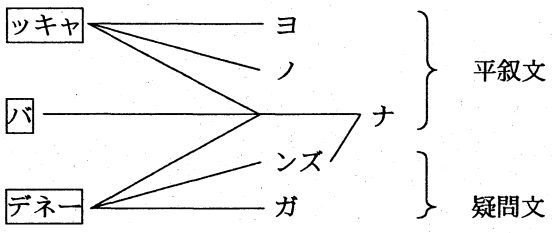
(14) お前、明日行く {*ッキャ／*バ} [2] ？ 【Yes-No 疑問】

(15) 早く行け {*ッキャ／*バ／*ンデネーガ} ！ 【命令】

(16) 早く行かー {*ッキャ／*バ／*ンデネーガ}。 【意志】

他の文末詞との共起関係は次の通りである。「ヨ・ノ・ナ」は平叙文に現れる文末詞、「ンズ・ガ」は疑問文に現れる文末詞である。

(17)



最後に、話者の属性と使用する形式との関係について簡単に見ておく。当該方言では確認要求に関わる形式が多く存在するが、話者の性・年層によって用いられる形式が異なることがある。〔表 1〕には、形式と話者の属性の関係を示した。表中の「－」は、その属性について偏りが見られないことを表す。

〔表 1　話者の属性と使用する形式〕

形式	世代	性
ッキャ	若年層	－
ジャナ	中年層	－
バ・バナ	－	男性的
デバ・デバナ	老年層	男性的
デネー＋文末詞	－	－

今回のインフォーマントは、若年層・男性であるため、ッキャ・バ（ナ）の 2 形式を用いる。以下では、この 2 系統の形式とデネー（ガ）をとりあげ、記述を行うことにする。

また、聞き手の属性（場面）と形式との関係を見てみると、バ（ナ）は（方言を話す）目上の人に対しては用いることができないという制約がある。以下の例はある話者（YA）による異なる聞き手（SA と YC）への発話であるが、祖父（SA）に対してはッキャを用いるのに対して（18）、YC（同性・同世代の友人）に対してはバナを用いている（19）。

(18) 065YA：んー、Y（学校名）　去年　K（大会名）で　ベストエイトまで　行ったッキャ　（SA：ん）だはんで　人　集まんねんだびょん。（SA：ん）んー。K（学校名）は　ずんぶ　人　入っちゅー　みてーだよ。…（略）

（大阪大学 SS コーパス ver.1.0　津軽：老－若談話より）

(19) 013YA：おめーも　忙しっつー　話だバナ。

014YC：んー、今な、忙しー時期だんだいな。

（大阪大学 SS コーパス ver.1.0　津軽：若－若談話より）

3. 分析の枠組み

ここでは、分析のための枠組みを提示する。まず、確認の仕方から大きく分けられるのは、(1) 話し手の認識が不確かでありそれを聞き手に持ちかけて確認を行うのか、(2) 話し手の認識は確かであり（半ば一方的に）聞き手にそれを持ちかけるのか、という違いである。(1) は宮崎 (2000) の《聞き手依存型》確認要求にあたり、(2) は《聞き手誘導型》確認要求にあたる。標準語では、田野村 (1988) の〈ではないか第二類〉[3]（以下「ではないかⅡ類」と示す）が (1) のタイプの確認要求を表し、〈ではないか第一類〉(以下「ではないかⅠ類」) が (2) のタイプの確認要求に対応する。

(20) もしかして、お前体調でも悪いんじゃないか？　《聞き手依存型》

(21) ほら、昔ここに本屋があったじゃないか。　《聞き手誘導型》

《聞き手依存型》の確認要求は (20) のように、「もしかして」のような不確かさを表す副詞と共起する、上昇イントネーションと共起する、といった特徴を持つ。

《聞き手誘導型》確認要求は、話し手の認識を提示しそれが受け入れられるか否かを確認するものであるが、その確認の仕方を詳細に見るために、ここでは以下のような枠組みを設定しておく。

(22) a. 情報の認識時（既定／新規）

b. 情報の共有度（共有情報／話し手情報）

(22a) は、話し手の認識が発話時以前に確立したもの（規定情報）か発話時に新しく導入したもの（新規情報）かという観点である。《聞き手誘導型》確認要求は、話し手の認識を聞き手にもちかけるものであるため、どの形式も規定情報を表す必要がある。標準語の「ではないか」は、次の (23) のように規定情報を相手に持ちかける場合に加えて、(24) のように発話の場で新規に導入した事柄を述べる場合にも用いることができる。すなわち、「認識時」はデハナイカの記述には関与的ではない。

(23) 同級生に加藤さんっていたじゃない。背の高い男の子。

(24) a. あれ、空っぽじゃないか。

b. 〔屋内から外に出て〕なんだ、雨が降ってるじゃないか。

(22b) は、話し手の評価・判断など聞き手が知り得ることができない情報か、それとも目の前にある物など聞き手と共有できる情報か、といった区別である（聞き手しか認識できない情報についての確認は「ではないか」で行えず、代わりに「だろう」が行う）。確認要求は聞き手に確認を要求するものであるため、原則的に聞き手との間で共有した情報である必要がある。標準語の「ではないか」は、(23) のように共有情報について確認することに加えて、以下に示すように話し手個人の評価を述べることができる。

(25) 妻：このジャケット素敵でしょ。

夫：うん、なかなか似合ってるじゃないか。　(蓮沼 1995 : 396)

以上のような分析枠を用い、次節では各形式の記述を行う。

4. 各形式の記述

4.1. バ

バは〈ではないかⅠ類〉相当の意味を表す形式であり、したがって《聞き手誘導型》の確認要求を表す。基本的に〈ではないかⅠ類〉が担う用法は全て表すことができる。

まず、「情報の認識時」についてであるが、(26) のように規定情報について聞き手の確認を求める用法のほかに、(27) のように発話時に新しく情報を導入するような場合にも用いることができる。

(26) 〔揚げ物は食べないという相手に〕お前、唐揚げが大好物だったバ。

(27) a. 〔開けてみたら中身が空っぽなのを見て〕何だ、空っぽだバ。

b. あっ、こんなところに（探し物が）あったバ。

また上の (27) から、バを用いるには必ずしも聞き手が必要ではないことが分かる。
なお、標準語の「ではないか」はこれから起こる事柄 (28) や、証拠に基づいた推論 (29) など、認識する事柄が話し手に確認できない場合に用いることができないが、バはこのような文でも用いることができる。

(28) 〔トラックから荷物が落ちそうだ〕あっ、落ちる {*じゃないか／バ}。

(29) 〔物音がして〕あれ、誰か来たみてー {*じゃないか／だバ}。

最後に「情報の共有度」であるが、バは (「ではないか」と同様に) 話し手個人の判断 (30) や評価 (31) を述べる文に現れることができる。

(30) 〔いつも元気がない相手が今日は元気そうだ〕おっ、お前今日は元気そうだバ。

(31) a. おっ、なかなか旨いバ。

b. なかなか似合ってるバ。

c. まぁまぁ、難しいことはいいバ。

当然の事ながら、聞き手と共有できる情報についてもバは用いられる。

(32) a. ほら、あそこに郵便ポストが見えるバ。あそこを曲がって…。

b. 同級生に大将って呼ばれてる奴いたバ。あいつ今大阪にいるんだって。

c. 仮に式に 100 人来るとするバ。一人千円で考えると 10 万円だ。

c. だから言ったバ。あの人には気をつけなさいって。

なお、標準語の「ではないか」は意志形に接続することができるが、当該方言のバは不可能である。

(33) a. そこまで言うならやってやろう {じゃないか／*バ}。

b. よし、今日は派手に宴会といこう {じゃないか／*バ}。

以上、バの用法について見た。

4.2.　ッキャ

ッキャはバと同じく〈ではないかⅠ類〉に相当し、《聞き手誘導型》の確認要求を表す。しかしながら、バのように〈ではないかⅠ類〉が表す全ての用法で用いられるわけではない。

まず「情報の認識時」に関しては、既定情報のみを表し、新規に導入した情報を表す文では不適格となる。以下の（34）では「幼少の時、祖父（SA）と野球をやった」という情報について、聞き手に確認を求めている。

（34）003YA：おじーちゃん　野球　やってったんだべ。
004SA：んー、野球、ちょっとなー。
005YA：ちせー時　やったッキャ、そ、外で。（SA：んー）覚いでね？
006SA：思い出すな。
007YA：ちっちぇ時　よぐ　やったッキャ、外で。
008SA：んだ。
（大阪大学SSコーパスver.1.0　津軽：老ー若談話より）

（35）a.〔開けてみたら中身が空っぽなのを見て〕*何だ、空っぽだッキャ。
b. *あっ、こんなところに（探し物が）あったッキャ。
c.〔研究について考えていて〕*そうか、こう考えればいいッキャ。

上の（35）から分かるとおり、ッキャはバとは異なり、聞き手の存在を必要とする形式であるということもわかる。

また、話し手個人の判断や評価を表す場合、ッキャは用いることができない。（38）のように、聞き手も認識できるものである必要がある。つまり、ッキャは「共有情報」にしか言及できないといえる。

（36）　*おっ、お前今日は元気そうだッキャ。

（37）a. *おっ、なかなか旨いッキャ。
b. *なかなか似合ってるッキャ。
c. *難しいことはいいッキャ。

（38）a. ほら、あそこに郵便ポストが見えるッキャ。あそこを曲がって…。
b. 同級生に大将って呼ばれてる奴いたッキャ。あいつ今大阪にいるんだって。
c. 仮に式に100 人来るとするッキャ。一人千円で考えると10 万円だ。
c. だから言ったッキャ。あの人には気をつけなさいって。

このようなッキャの「共有情報にしか言及しない」という特徴から、（39）（40）のように聞き手の不確かな認識を受けて用いられたッキャには「聞き手も知っているはずだ」という意味が伴う。

（39）A：結婚するんだって？
B：んだッキャ（お前も知っているはずだ）　　cf. ??そうじゃないか

(40) A：結婚したんだね。

B：んだッキャ（お前も披露宴にいたじゃないか）　cf. そうじゃないか

一方、聞き手に全く認識が無い場合にもッキャが用いられることがあるが、この場合には聞き手の認識を前提としてはおらず、この点で「ではないか」とは異なる。

(41) 〔A は電池を探している。B は昨日机の上にあるのを見たが、A はそのことを知らない。〕

A： 電池どこかなぁ。

B： 昨日机の上にあった｛#じゃないか／よ／ッキャ｝。

(42) 〔A と B は A の家で C を待っている。実は C は 10 分前に来ていたのだが、A はそれを知らず、B だけが知っている。〕

A： C 君遅いなぁ。

B： 10 分前に来た｛#じゃないか／よ／ッキャ｝。

この例については、§5 でバと対照することによって詳しく考察する。

以上、ここではッキャの用法について見た。

4.3. デネー＋文末詞

デネー（＋文末詞）は、否定疑問と〈ではないか II 類〉の用法を担い、〈ではないか I 類〉の意味で用いられることはない。したがって、基本的に《聞き手依存型》の確認要求のみを表すと言える。この点、標準語の「ではないか」とは異なる。以下の（43）は否定疑問文（〈ではないか III 類〉）の例、（44）は〈ではないか II 類〉の例、そして（45）は〈ではないか I 類〉の例である。

(43) 本当にお前高校生デネー｛ガ／ナ／ンズ｝？

(44) a. 〔あいつは来るの？〕たぶん来るんデネー｛ガ／ナ／ンズ｝。

b. お前、体調でも悪いんデネー｛ガ／ナ／ンズ｝？

(45) a. *よぉ、山田デネーガ。

b. *だから言ったデネーガ。行くなって。

c. *自分から言い出したんデネーガ。

d. *ほら、あそこに郵便ポストが見えるデネーガ。あそこの先を曲がって…

e. *おっ、なかなかうまいデネーガ。

f. *何をする、危ないデネーガ。

推量形式が後接する点（(46)(47)）や、カをノカに置き換えられる点（48）も標準語の〈ではないか II 類〉と対応している（田野村 1988：19）。

(46) 「では退院は何時頃ですの」

里見は口ごもった。退院――、財前には永遠に退院ということはないのだった。何日か、何か月かの延命を計ることだけしか、残されていない。

「まさか、まさか、癌(クレスス)だったのではないでしょうね」

（山崎豊子『白い巨塔』）

(47) 107YA：　んー。T（人名）、J（学校名）の　T先生　いるっきゃ（SA：んー）あの人、M（地名）さ　ひとり　いーの　いるんだってさ（SA：んー）この前　しゃべってったはんで。（SA：んー）んー、誰だべなど、H（人名）でねーべなど［笑いながら］思っちゃーんだけど。（SA：んー）ん。

（大阪大学SS コーパス Ver. 1.0　津軽：老ー若談話より）

(48) 何かの間違い｛じゃないのか／デネーノガ｝？

なお、標準語の〈ではないかII類〉には、「じゃないか」の他に「じゃない」「じゃないの」などの形式が含まれるが、これらのうち「～と思う」に導かれる従属節に現れることができるのは「じゃないか」に限られる。当該方言でも同様に、デネー＋文末詞のうち、「～と思う」従属節に自然に現れるのは、デネーガだけである（50）。

(49) あの人が犯人じゃない｛*ø／か／??の｝と思って、色々調べたんだ。

(50) あの人が犯人デネー｛*ø／ガ／?ナ／*ンズ｝と思って色々調べたんだ。

また、独り言用法では、ンズのみが不適格となり、ガ・ナ・ンズナは適格となる。

(51) この分だと明日は雨なんデネー｛ガ／ナ／*ンズ／ンズナ｝。

最後に、イントネーションとの共起関係は以下の通りである。

(52) a. もしかして、あいつが犯人なんデネー　｛*↓／ ↑｝
　　b. もしかして、あいつが犯人なんデネーガ　｛ ↓／ ↑｝
　　c. もしかして、あいつが犯人なんデネーナ　｛ ↓／*↑｝
　　d. もしかして、あいつが犯人なんデネーンズ　｛ ↓／*↑｝

(53) a. お前、調子悪いんデネー　｛*↓／ ↑｝
　　b. お前、調子悪いんデネーガ　｛*↓／ ↑｝
　　c. お前、調子悪いんデネーナ　｛ ↓／*↑｝
　　d. お前、調子悪いんデネーンズ　｛ ↓／*↑｝
　　e. お前、調子悪いんデネーンズナ｛ ↓／*↑｝

以上の例から分かるように、デネーは上昇イントネーションとのみ共起するのに対して、ナ・ンズは（53）のように聞き手に問う場合でも上昇イントネーションをとることはない。

なお、デネーと共に用いられる文末詞はいずれも Yes-No 疑問文でも現れるものである（54）。また、ンズは WH 疑問文でも現れる（55）。

(54) a. お前、行く｛ガ／ナ／ンズ｝？
　　b. 本当にお前、行がねー｛ガ／ナ／ンズ｝？

(55) 誰行く｛?ガ／バ／ンズ｝。

この点、疑問文との関係を考える必要があるが、ここではひとまず現象を指摘するにとど

めておく。

4.4. まとめ

以上、本節では確認要求を表す形式について、その異同を確認した。ここで述べたことをまとめると、〔表 2〕のようになる。表中の「○」「×」はそれぞれ、その用法で用いられる／用いられないことを表す。《聞き手誘導型》確認要求の場合は、「○」の代わりに特徴を記した。

〔表 2　各形式の異同〕

		バ	ッキャ	デネ一類
聞き手誘導型	情報の認識時	新規可	新規不可	×
	情報の共有度	話し手情報	共有情報	×
聞き手依存型		×	×	○

上表からわかる通り、当該方言の確認要求表現はバ・ッキャとデネ一類に大きく分かれる。問題となるのは、共に《聞き手誘導型》確認要求を表すバとッキャの違いであるが、これについては、次節で詳しく考察することにする。

5. バとッキャ

前節である程度違いが明らかになったバとッキャであるが、ここでは、そのような違いが現れる原因、すなわち各形式がどのようなメカニズムで確認要求という意味を表すようになるかを考えてみたい。

まず、バとッキャの違いを整理しておく。2 形式の違いは〔表 2〕にあげた特徴に加えて、以下のようなものがあった（意味に関わるものだけをあげる）。

(56) a. バ

- 年上に対しては用いにくい
- WH 疑問文に現れる
- ナ（標準語の「ね」相当の意味を表す）と共起する
- 独り言で用いられる

b. ッキャ

- ナ（「ね」相当）、ノ（「ね」相当）、ヨ（「よ」相当）と共起する
- 独り言では用いられない

このような特徴から、ここでは 2 形式の意味を次のように考える。

(57) バの意味：

バは、発話時の話し手の認識と発話時の状況とがそぐわないような状況において、発話時の話し手の認識を提示し、調整をはかるという意味を表す

(58) ッキャの意味：

ッキャは、話し手と聞き手が共有している（と話し手が想定する）事柄を提示し、それについて聞き手に確認を求めるという意味を表す

バの意味は、「ではないか」と共通するものである。すなわち、確認要求で用いられた場合は、聞き手との間に認識のギャップが存在するような状況で「話し手の認識」を問題とする形式である[4)]。それに対してッキャの意味は、「話し手と聞き手の両方が持つ情報」を聞き手に持ちかけるというものであり、必ずしも「認識のギャップ」が存在する必要はない、という点で「ではないか」とは異なる。ッキャが話し手個人の評価や見解を述べることができないことは既に述べたが (37)、これは話し手の個人的な情報を共有情報として想定しにくいという理由によるものと考えられる。また、独り言でッキャを用いることができないのは (35)、その用法が聞き手の存在を前提としておらず、そもそも共有情報か否かを問題とできないためである。

上のような基本的意味を踏まえ、以下では各形式がどのような確認要求を行っているのかを、それ以外の用法との関連も考えながら見ていく。まず次の例を参照されたい。

(59) 〔いつもはみすぼらしい格好をしている人が今日は珍しくスーツを着ている〕

お前、今日は良い服着てる｛バ／*ッキャ｝。

この例ではッキャが不適格となるが、これは前述の通り「遅い」という認識が話し手個人のものであるためである。すなわち、相手の服のことが話題にのぼっていないような状況で、「良い服を着ている」という事柄を共有情報として提示できないためである。一方、バが行っていることは、「普段はみすぼらしい格好をしている」というこれまでの認識と「今日は良い服を着ている」という発話時の話し手の認識がそぐわない状況で、発話時の話し手の認識をとりあげ、提示しているというものである。

ところが、談話に服の話題がのぼり聞き手と情報を共有する土台ができあがると、ッキャを用いることが可能になる。

(60) 〔(59) と同じ状況で〕

A1：お前、今日は良い服着てる｛バ／*ッキャ｝。

B1：こんなの普段着だよ。

A2：何言ってるんだよ。今日は良い服着てる｛バ／ッキャ｝！

この場合ッキャは、「お前は今日は良い服を着ている」ということを2人の共通認識として持たないか、のようにして確認要求の目的を果たそうとしていると考えられる。相手の「普段着だ」という認識を踏まえた上で「良い服を着ている」という事柄を持ち出すために、「対立」のようなニュアンスが生じることになる。また、このような発話を行う動機として、「聞き手は普段着だと思っている」という文脈がある。このように、ッキャを用いるには前提として次のようなものがあると考えられる（(b) については後述する）。

（61）ッキャの談話上の制約：

ッキャを使用するためには、談話において以下のいずれかの条件が成立している必要がある

（a）共有情報として持ち出すために、関連した話題が既に談話上に存在する

（b）既に共有された情報である（話題が存在する必要はない）

したがって、(59) のような状況で（不自然だが）あえてッキャを用いたとすると、次のように、対立命題を確認する応答（62B1)、もしくは共有情報として見なされたことを示す応答（62B2）が続くことになる。

（62）〔(59) と同じ状況で〕

A1：お前、今日は良い服着てるッキャ。

B1：俺、良い服じゃないなんて言った？　【対立命題の確認】

B2：うん、それで？　【共有情報として見なした】

一方、(60A2) の例でバが行っていることは、聞き手の「スーツは普段着だ」という認識と、話し手の「今日は良い服を着ている」という認識がそぐわない状況で、話し手の認識を提示することによって、共通認識に至ろうとするものである。聞き手と話し手の認識にギャップがある状況で話し手の認識をことさらにとりあげるために、ここでも「対立」といったニュアンスが生じることになる。以上の説明は、次の発話例にも当てはまる。

（63）〔帰りの遅い夫を非難して〕

妻：遅い {バ／*ッキャ}。

夫：仕方がない {バ／ッキャ}。仕事が忙しいんだから。　（蓮沼 1995：394）

さて、以上の例は聞き手に何らかの認識があり、それに対するものとして「話し手の認識を提示する」(バ)、あるいは「共有情報として提示する」(ッキャ）ものであった。そこでは共に「対立」というニュアンスが現れる。しかし、次例のように聞き手に認識が無い場合、両者のニュアンスが全く異なったものとなる。

（64）〔A は電池を探している。B は昨日机の上にあるのを見たが、A はそのことを知らない。〕

A：電池どこかなぁ。

B：昨日机の上にあった {バ／ッキャ}。　（=41）

（65）〔A と B は A の家で C を待っている。実は C は 10 分前に来ていたのだが、A はそれを知らず B だけが知っている。〕

A：C 君遅いなぁ。

B：10 分前に来た {バ／ッキャ}。　（=42）

バを用いた場合は、話し手の認識と聞き手の認識がそぐわないことを示すために、「対立・非難」という意味を読み込んで解釈する必要がある（「ではないか」でも同様のことが言える)。例えば（64）の場合、「昨日机の上にあった」(話し手の認識）と、昨日のことについ

ては考えていない聞き手の認識がそぐわない状況でバを発することによって、「聞き手も机の上にあったのを知っているはずだ」という意味が生じる。一方で、ッキャは「認識のギャップ」を前提としていないために、「対立・非難」のようなニュアンスは現れない。あくまでも「昨日机の上にあった」こと（64）、「10分前に来た」こと（65）を共有情報として提示するのみである。以下の例のように「ではないか」を用いにくい例でッキャが現れることも同様の理由による。

（66）A：結婚するんだって？

B：??そうじゃないか／ンダッキャ　（=39）

聞き手の「結婚する」という認識と、話し手の「そうだ」という認識が一致しているために「ではないか」は用いにくいが、ッキャはそのような前提を持たないために、適格となる。また、ここでは「～だって？」のように伝聞情報として提示している聞き手に対してッキャを用いることによって、「お前も知っているはずだ」というニュアンスが生じることになる。

以上、本節では《聞き手誘導型》の確認要求を表すバとッキャについて、その違いを考察した。ここで述べたことをまとめると、〔表3〕のようになる。併せて標準語の「ではないか」についてもあげておく。

〔表3　バとッキャの違い〕

	ではないか	バ	ッキャ
認識のギャップ	あり	あり	なし
提示する情報	話し手認識	話し手認識	共通認識

6. まとめ

本稿では、青森県弘前市方言の若年層話者に用いられる確認要求表現のうち、標準語のデハナイカに相当するものをとりあげ、考察を行った。まとめると以下の通りである。

（a）バ・ッキャは〈ではないかⅠ類〉に相当し、《聞き手誘導型》の確認要求を表す。デネー＋文末詞は〈ではないかⅡ類〉に相当し、《聞き手依存型》の確認要求を表す。

（b）バ・ッキャは同じ《聞き手誘導型》の確認要求を表すが、以下の点で異なる。

（b-1）ッキャは独り言、個人的な見解を述べる場合に用いられない

（b-2）バは年上に対して用いにくい

（b-3）両者共に「ね」相当の文末詞と共起するが、ッキャは加えて「よ」相当の文末詞とも共起する

（c）（b）からッキャは情報を「共有すべきもの」あるいは「共有したもの」として提示し聞き手に確認を求めるのに対して、バは「話し手の認識と現実の状況がそぐわない状況で、話し手の認識を提示する」という意味をもつと考えられる。

確認要求表現全体から考えると、当該方言は何を確認の対象とするかについて、以下のように3形式の対立によって成り立っていることが予想される。

〔表4　確認要求表現の比較〕

	話し手認識	共通認識	聞き手認識
弘前市方言	バ	ッキャ	ベ
標準語	ではないか	―	だろう

そのためには、「だろう」に相当する「ベ」についても考える必要がある。また、「話し手認識」を確認の対象とする形式がいずれも疑問文との関わりを持っているという点も注目すべきである。今後の課題としたい。

【注】

1)　話者の情報は以下の通り。
男性、調査時29歳（1974年生まれ）
移住歴：0～18歳：青森県弘前市、18～22歳：東京都三鷹市、22歳～：大阪府池田市

2)　「デネー＋文末詞」は、それ自体が疑問文を形成する（したがって、疑問文との「共起」ではない）ため、この例文からは省いた。

3)　田野村（1988）は「ではないか」という形式が形態的・意味的に3つに分けられることを指摘した。重要な部分のみをあげておく（p.17）。

第一類の「ではないか」は、発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするものである。「ない」を含むとは言え、前に来る表現の内容が否定されているわけではない。
よう、山田じゃないか。
何をする、危ないじゃないか。
自分から言い出したんじゃないか。
第二類の「ではないか」は、推定を表現する。この場合も、話者は前の表現の内容を否定してはおらず、寧ろ、それを認める方に傾いている。（以後、文例の末尾の「？」は文末音調の上昇を表すものとする。）
（不審な様子から）どうもあの男犯人じゃないか？
（空模様を見て）雨でも降るんじゃないか？
第三類の「ではないか」においては、「ない」が否定辞本来の性格を発揮する。
（1は素数でないことを教えられて）そうか、1は素数じゃないか。
（1ガ素数デナイト君ハ言ウガ得心デキナイ。）本当に1は素数じゃないか？

4)　渋谷（本誌）では山形市方言のバをとりあげているが、基本的に当該方言のバとは異なる意味を表す。しかし、当該方言のバの特徴である「認識のギャップ」が「それまでの認識と現在の認識が異なる」という意味で現れる場合には、山形市方言のバの特徴である「意外性」と接近した意味を表す。

【引用文献】

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

渋谷勝己（2004）「山形市方言の文末詞バ―ヨと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』6

大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室（本誌）
田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152, pp.16-30
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為―『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法―」仁田義雄『複文の研究（下）』pp.389-419　くろしお出版
三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1, pp.15-26 大阪大学文学部現代日本語学講座
宮崎和人（2000）「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106, pp.7-16

まつまる　みちお（大阪大学大学院生）
matsumaru@par.odn.ne.jp